

『太平經鈔』卷五(第一二紙b第八行〜第一四紙b第四行)

担当 佐々木聡

【原文一】

天者好生道、故爲天經。積德者地經。地者好養、故爲地經。積和而好施者、爲人經。和氣者相通往來、人有財相通施及往來、故和爲人經也。

【訓讀一】天は生道を好み、道は故に天の經と爲る。徳を積むは地の經なり。地は養を好み、故に地の經と爲る。和を積みて施すを好むは、人の經爲り。和氣は相ひ通じて往來し、人は財有れば相ひ通じて施し、往來するに及ぶ、故に和は人の經と爲るなり。

【試譯一】

天は生道を好み、ゆえに天の經典(規範)となる。徳を積むことは地の經典である。地は養うことを好み、(徳は同じく養うことを好むが)ゆえに(徳を積むことは)地の經典となる。和を積み、施すことを好むことは、人の經典である。和氣は互いに通じ合つて交際し、人は財物があれば互いに通じあつて施し、交際することになるので、和(を積むこと)は人の經典となる。

【注釋一】

○天者好生、道故爲天經。積德者地經。地者好養、故爲地經。積和而好施者、爲人經。和氣者相通往來、人有財相通施及往來、故和爲人經也。

『要修科儀戒律鈔』卷之一「太平經云…真人問曰『何爲天經、何爲地經、何爲人經、何爲道經、何爲聖經、何爲賢經、何爲吉經、何爲凶經、何爲生經、何爲死經。』。神人曰『然、修積眞道。道者、天經也。天者好生、道亦好生、故爲天經。修積德者、地經也。地者好養、徳亦好養、故爲地經。修積和而好施與者、爲人經。和氣者、相通往來。人有財亦當相通往來、故和爲人經也。修積上古中古下古道辭爲道經。修積上古中古下古聖文爲聖經。修積上古中古下古賢辭爲賢經。其師吉者爲吉經、其師凶者爲凶經。其師生者、爲生經。其師死者、爲死經也。法由聖顯、道寄人弘。』。道經云「侯王若能守萬物將自化、當知人王有道、大道興隆、人王無道、大道廢矣。」

○天經

『太平經』卷四十一・受四件古文名書訣「今小之道書、以爲天經也。拘校上古中古下古聖人之辭、以爲聖經也。拘校上古中古下古大徳之辭、以爲徳經也。拘校上古中古下古賢明之辭、以爲賢經也。今念天師言、不能深知其拘校之意。願天師闡示其門戸所當先後、令使徳君得之以爲嚴教也。勅衆賢令使各得生校善意於其中也。」

○積和

『漢書』卷六十四下・終軍傳「夫（人）〔天〕命初定、萬事草創、及臻六合同風、九州共貫、必待明聖潤色、祖業傳於無窮。故周至成王、然後制定、而休徵之應見。陛下盛日月之光、垂聖思於勒成、專神明之敬、奉燔瘞於郊宮、獻享之精交神、積和之氣塞明、而異獸來獲、宜矣。」

○和氣

『太平經』卷四十二「凡事各以類相理。無形委氣之神人與元氣相似、故理元氣。大神人有形、而大神與天相似、故理天。真人專又信、與地相似、故理地。仙人變化、與四時相似、故理四時也。大道人長於占知吉凶、與五行相似、故理五行。聖人主和氣、與陰陽相似、故理陰陽。賢人治文便言、與文相似、故理文書。凡民亂憤無知、與萬物相似、故理萬物。奴婢致財、與財貨相似、富則有、貧則無、可通往來、故理財貨也。」

【原文二】

（承前）古者將學問者皆正其本。比若種木也。本索善種置善地、其生也、本末枝葉悉善。本者是其本師、枝實者是弟子。是故古之學悉先念思本、乃學其道也。故可爲者得與天心合、故吉也。夫種木不擇得善木、又植惡地、枝葉華實、安得美哉。此者始以端身正性、道意止歸之、元氣還以安身。念古法先師所職行、何以能自治。計得意極、且自得之、先以安形。始爲之、如嬰兒之遊、不用筋力、但用善意。詳念先人獨壽、其治獨意、以何得之。但以至道、繩邪去姦、比若神矣。無有竒怪、本正以是爲之、故得天心不負地意、四時周、五行安、子孫不相承負、各懷至德、不復知爲邪惡也。

【訓讀二】

古は將に學問せんとする者は皆な其の本を正す。比ぶるに木を種うるが若きなり。本より善種を索めて善地に置けば、其の生まるるや、本末枝葉悉く善し。本は是れ其の本師にして、枝實は是れ弟子なり。是れが故に古の學は悉く先づ本を念思ひ、乃ち其の道を學ぶなり。故に爲すべき者は天心と合するを得、故に吉なり。夫れ木を種うるに擇びて善木を得ざれば、又たは惡地に植うれば、枝葉華實、安んぞ美なるを得んや。此の者始むるに身を端し性を正すを以てすれば、道意止だ之に歸し、元氣還りて以て身を安んず。念ずるに、古法先師の職らに行ふ所、何を以て能く自ら治むるや。計定まりて意極まり、且つ自ら之を得んとすれば、先づ形を安んずるを以てす。始めて之を爲すは、嬰兒の遊ぶが如く、筋力を用ゐず、但だ善意を用うるのみ。詳かに念ずるに、先人獨り壽いのちながく其の治獨り意なるは、何を以て之を得るや。但だ至道を以て、邪を繩ただして姦を去る。比ぶるに神の若く、竒怪有る無し。本正しければ、是を以て之を爲す。故に天心を得て地意に負かず、四時周りて五行安らぎ、子孫相ひ承負せしめず、各おの至徳を懷き、復た知りて邪惡を爲さざるなり。

【試譯二】

いにしえは、学問をしようという者は、みなその本（根本）を正したものである。なぞらえるなら、木を植えるようなものである。もとより善き種を求めて善き土地にまけば、その樹木が生長すると、その根幹から先端、枝葉はことごとく善きものとなる。本とはその本師（祖師）であり、枝や実は弟子なのである。それゆえに、いにしえの学問はことごとく先ずは本（根本）を思念して、そこでその道を学ぶのである。ゆえにこの学問を大成すべき者は、天心に合致することがかなうから、吉となる。いったい木を植えるにあたり善き木を選ぶことができなければ、あるいは悪しき土地に植えることになれば、枝葉や花、実はどうしてよきものとなるか。この（学問しようという）者は、はじめに身と性を正しくすれば、道意はこれに回帰し、元気はめぐって身を安らかにしよう。考えてみれば、古法や先師がもつぱらに行うことは、何によって自らを治めることができたのか。計画が定まり考慮しつくして、かつ自らこれを得ようとするのであれば、先ずは形体を安んずることである。はじめでこれを行うときは、嬰兒が遊ぶようにこれを行い、筋力を使わず、ただ善意のみを用いる。さらに詳しく考えてみると、先人が独力で長寿を得、その治が独力ですばらしいものとなったのは、何によってこれを得たのか。ただ至道をもって邪悪なるものを正し、姦佞なるものを除いたのである。なぞらえるなら、神のようであり、奇異なことは無い。本（根本）が正しければ、これによりこうした結果に至るのである。それゆえに天の心情を得て地の意志に背くことなく、四時はめぐり、五行は安定し、子孫が（先人の過を）背負うこともない。それぞれ至上の徳を抱き、また邪悪なことに手を染めたりはしないのである。

【注釋二】

○正本

『太平經鈔』卷二「欲致善、但正本。本正則應天文、與聖辭相得。再轉應天理、三轉爲人文、四轉爲萬物。萬物則生浮華、則亂敗矣。天文將出、以考元正始、除其過者置其實、明理凡書、即天之道也。得其正言者、與天意相應。」

○承負

『太平經鈔』卷二・解承負訣「天地開闢已來、凶氣不絕、絕者而後復起、何也。夫壽命、天之重寶也。所以私有德不可僞致。欲知其寶、乃天地六合八遠萬物、都得無所冤結、悉大喜、乃得增壽也。一事不悅、輒有傷死亡者。凡人之行、或有力行善、反常得惡、或有力行惡、反得善。因自言爲賢者非也。力行善、反得惡者、是承負先人之過、流災前後、積來害此人也。其行惡反得善者、是先人深有積畜大功、來流及此人也。」

【原文三】

入室獨居、思經道之本所須出入。賢者先得其意、其次隨之、遂俱入道、與邪相去矣。入室思存、五官轉移、隨陰陽、孟仲季爲兄弟。應氣而動、順四時五行。天道變化、以爲常矣。失氣則死、有氣則生。萬物隨之、人道爲雄。故立五官、隨氣而興、天道因氣飛爲雄。真人積氣、聚神明、故道終常獨行、萬民失氣故死。喪者爲賤、生者爲貴。子守道、可長久隨氣而化。天爲常、無急名利。道自行、天道常生無有喪、地道持兩主死亡。

【訓讀三】

室に入りて獨り居り、經道の本の須く出入すべき所を思ふ。賢者は先づ其の意を得、其次に之に隨ひ、遂に俱に道に入り、邪と相ひ去る。室に入りて思存し、五官の轉移は、陰陽に隨ひ、孟・仲・季もて兄弟と爲す。氣に應じて動き、四時五行に順ふ。天道の變化は、以て常と爲す。氣を失へば則ち死し、氣有れば則ち生く。萬物之に隨へば、人道雄と爲る。故に五官を立てて、氣に隨ひて興る。天道は氣の飛ぶに因りて雄と爲る。真人氣を積み、神明を聚む。故に道終に常に獨り行る。萬民氣を失ふが故に死す。喪者は賤と爲し、生者は貴と爲す。子道を守れば、長久に氣に隨ひて化すべし。天は常爲り、名利を急とすること無し。道は自ら行り、天道は常に生ありて喪ふこと有る無く、地道は兩を持ちて死亡を主る。

【試譯三】

室内に入つて獨り居り、經道の根本にして出入すべきものを思念する。賢者は先ずその意味を理解して、次にそれに従い、そして共に道に入り、邪と距離をわかつ。室内に入り、存思して、五官の轉移は、陰陽に従い、孟・仲・季（とめぐる季節）を兄弟とする。氣に応じて動き、四時五行に従う。天道の變化は、以上を常軌とする。氣を失えば死亡し、氣を保てば生存する。万物はこの法則に従うから、人の道はその筆頭となる。故に五官を立て、氣に従つて盛んとなる。天の道は氣が飛翔することにより筆頭となる。真人は氣を蓄積し、神明を招き集める（から不死である）。ゆえに（人の爲すべき）道は終始いつもひとりでにめぐる。（一方で）万民は氣を失うことで死んでしまう。滅ぶ者を卑賤とみなし、生きている者を高貴とみなす。そなたが道を守れば、長い時をかけて氣に従い、やがて仙化できるはずである。天は常軌であり、名利を重んじることはない。道はおのずからめぐり、天道は常に生を有して滅びることなく、地道は兩方を持ちて死亡をつかさどる。

【注釋三】

○「思存」

『抱樸子』内篇・明本「夫入九室、以精思存眞一、以招神者、既不喜誼譁而汚穢。而合金丹之大藥、鍊八石之飛精者、尤忌利口之愚人。凡俗之聞見、明靈爲之不降、僊藥爲之不成。」

○五官

『靈樞經』五閱五使「黃帝問於岐伯曰『余聞刺有五官五閱、以觀五氣。五氣者、五藏之使也、五時之副也。願聞其五使當安出。』岐伯曰『五官者、五藏之閱也。』黃帝曰『願聞其所出、令可為常。』岐伯曰『脈出於氣口、色見於明堂、五色更出、以應五時、各如其常、經氣入藏、必當治裏。』帝曰『善。五色獨決於明堂乎。』岐伯曰『五官已辨、閭庭必張、乃立明堂。明堂廣大、著蔽見外、方壁高基。引垂居外、五色乃治、平搏廣大、壽中百歲。見此者、刺之必已、如是之人者、血氣有餘、肌肉堅致、故可苦以外。』黃帝曰『願聞五官。』岐伯曰『鼻者肺之官也。目者肝之官也。口唇者脾之官也。舌者心之官也。耳者腎之官也。』黃帝曰『以官何候。』岐伯曰『以候五藏。』

【原文四】

夫上古聖賢者於官、中士度於山、下士蟲死居民間。賢者見書、深思此言、先難後易、身亦無患。而守德成大道、身學已更九室成神人。其念常與凡人殊絕異、朝夕未常念地上、欲聞天事也。意乃念天上職事、乃後可下九室。積精篤竭、自化易其形容。即是上天聖人也。不得復理民間時事明矣。吾之書乃使高士遂生而不見、下士不敢妄爲妄言也。吾書爲道所能窮竟人志、使人賢不肖各盡其才。至死無可復悔者、乃各盡其天命也。欲壽樂久存者、思正道意、可往矣。不樂久存者、宜就俗事、但樂止其身而已。

【訓讀四】

夫れ上古の聖賢は官に於り、中士は度して山に於り、下士は蟲死して民間に居る。賢者は書を見て、深く此の言を思ひ、難きを先にして易きを後にすれば、身らも亦た患ひ無し。而して徳を守りて大道を成し、身ら學びて已に九室を更れば、神人と成る。其の念常に凡人と殊絶に異なり、朝夕に未だ常て地上を念ぜず、天事を聞かんと欲するなり。意乃ち天上の職事を念じ、乃ち後に九室に下るべし。精を積むこと篤く竭くせば、自ら化して其の形容を易ふ。即ち是れ上天の聖人なり。復た民間の時事を理むるを得ざるは、明らかなり。吾れの書乃ち高士をして遂に生きて見えざらしめ、下士をして敢へて妄りに妄言を爲さざらしむるなり。吾が書道の能く人志を窮竟むる所と爲り、人の賢と不肖とをして各おの其の才を盡くさしむ。死に至りて復た悔ゆべきなき者、乃ち各おの其の天命を盡くすなり。壽を欲して久しく存せんと樂ふ者は、正道の意を思ひ、往くべきなり。久しく存するを樂はざる者、宜しく俗事に就きて、但だ其の身を止むるを樂ふべきのみ。

【試譯四】

いったい上古の聖賢は官職にあり、中士は山で仙度し、下士は民間で虫死するものである。賢者は書を読んで、深くこの言葉に思い巡らせ、困難なことを先にして容易なことを後にすれば、自らもまたわざわいを免れる。そして徳を守って大道を成就し、自ら学んで既に九室を経めぐれば、神人となる。その思念は常に凡人とは全く異なり、朝夕に未だかつて地上(の

俗世のこと)を懸念したことはなく、天上のことを聞こうとするのである。意識はそこで天上の職務のことを思念し、そうしてから九室に下らなければならぬ。熱心に精を蓄積して成し遂げればおのずから変化し、その姿を変える。これこそが上天の聖人である。再び民間の世事を治めることができないことは明らかである。わが書はそこで高士には生きたまま人前から姿を消させ、下士には決して軽々に妄言を吐かせないようにするのである。わが書は、道によって人の志を遂げられるようにされ、賢い者も不肖なる者もそれぞれにその才能を発揮させる。死に際になお悔いるべきことが無い者は、それぞれがその天命を尽くしたのである。長寿を欲して長く生存することを願う者は、正しい道の意味を考え、ゆくべきである。久しく生存することを願わない者は、俗事を全うして、ただその身を保つことを願うべきである。

【注釋四】

○夫上古聖賢者於官、中土度於山、下土蟲死居民間。

『抱朴子』内篇・明本「或云、上士得道於三軍、中士得道於都市、下士得道於山林、此皆爲仙藥已成、未欲昇天。雖在三軍、而鋒刃不能傷、雖在都市、而人禍不能加、而下士未及於此、故止山林耳。」

○九室

『黃庭内景經』常念章第二十二「常念三房相通達、洞得視見無内外。存漱五牙不饑渴、神華執巾六丁謁。急守精室勿妄洩、閉而寶之可長活。起自形中初不闕、三官近在易隱括。虛無寂寂空中素、使形如是不當汚。九室正虛神明舍、存思百念視節度。*六府修治勿令故、行自翱翔入天路。」

*梁丘子『修真十書黃庭内景玉經注』卷五十六「九室正虛神明舍(九室、謂頭中九宮室及人之九竅、使上宮榮華、九竅眞正、則衆神之所止也。洞神經云、天有九星、故稱九天、地有九宮故稱九地、人有九竅故稱九生。言人所由而生之也。)存思百念視節度(存念身中有百神、呼吸上下、一如科法。又云、千千百百、似重山、皆神象也。)」

『漢書』卷二十五下・郊祀志「其南有玉堂璧門大鳥之屬。立神明臺、井幹樓、高五十丈、輦道相屬焉。*」顏師古曰「漢宮閣疏云、神明臺高五十丈、上有九室、恒置九天道士百人。然則神明、井幹俱高五十丈也。」

(参考)『混元聖紀』卷三「乃授喜太陽金眞九鍊之法、謂之九室存思。第一無邪思、第二正身思、第三致政思、第四大正思、第五極正思、第六身正思、第七正眞思、第八洞玄思、第九大洞思。入此九室、行此九思、即與太陽合形、同臻於道。喜皆得其秘、再拜稽首、敬佩玄旨。」